遊獵行幸

べて、をかしきさまなる童、四位のわかきなどのせて、花の木かげよりこぎいでたるほどになく、おもしろし、舞樂さまゞきよらなる手をつくされけり、御あそびのゝち、人々うたたてまつる、

〔日本書紀十應神〕二十二年三月戊子、天皇幸難波、居於大隅宮、　九月丙戌、天皇狩于淡路島、是島者横海在難波之西、峯巖紛錯、陵谷相續、芳草薈蔚、長瀾潺湲、亦麋鹿鳧鴈、多在其嶋、故乘輿屢遊之、天皇便自淡路轉以幸吉備、遊于小豆嶋、　庚寅、亦移居於葉田、葉田、此云簸娜、葦守宮、

〔播磨風土記飾磨郡〕所以號英馬野、爲品太天皇○應神此野狩時、一馬走逸、勅云、誰馬乎、侍從等對云、朕御馬也、即號我馬野、

〔播磨風土記揖保郡〕櫂折山、品太天皇狩於此山、以櫂弓射走猪、即折其弓、故曰櫂折山、

〔播磨風土記神前郡〕所以云勢賀者、品太天皇狩於此川内、猪鹿多約出於此處、殺、故曰勢賀、

〔播磨風土記託賀郡〕云比也山者、品太天皇狩於此山、一鹿立於前、鳴聲比々、天皇聞之、即止翼人、故山者號比也山、

〔日本書紀十二履中〕五年九月壬寅、天皇狩于猟島、

〔日本書紀十三允恭〕十四年九月甲子、天皇猟于淡路島、時麋鹿猿猪、莫莫紛紛、盈于山谷、猟起蠅散、然終日以不獲一獸、於是猟止、以更卜矣、嶋神祟之曰、不得獸者、是我之心也、赤石海底有眞珠、其珠祠於我、則悉當得獸、爰更集處々之白水郎、以令探赤石海底、海深不能至底、唯有一海人、曰男狹磯、是阿波國長邑之海人也、勝於諸海人、是腰繫繩入海底、差頃之出曰、於海底有大鰒、其處光也、諸人皆曰、嶋神所請之珠、殆在是鰒腹乎、亦入探之、爰男狹磯抱大鰒而泛出之、乃息絶以死浪上、既而下繩測海底六十尋、則割鰒實眞珠有腹中、其大如桃子、乃祠嶋神、而猟之、多獲獸也、

〔日本書紀十四雄略〕二年十月癸酉、幸于吉野宮、　丙子、幸御馬瀨、命虞人縱獵、凌重巒赴長莽、未及移影、獮什七八、每獵大獲鳥獸、將盡、遂旋憩乎林泉、相羊乎藪澤、息行夫展車馬、問群臣曰、獵場之樂、使膳夫割